

近年の理学療法では、身体機能を単独で扱うよりも、環境や、身体と環境を有機的に関連づける課題のなかで相対的かつ包括的な評価と介入が行われている。ここでいう環境は、物理的な要素のみならず、身体内部の環境、自然環境、生活環境、人間関係、社会制度などを含んだ幅広い概念である。

本特集では、効果的な理学療法を進めるうえで環境をどのように捉えて具体的な介入を展開していけばよいのかについて、課題志向型アプローチの意味と生態心理学からみた身体と環境の関係について概観し、脳障害・運動器障害・発達障害の中で具体的に身体と環境がどのような関係にあるのかを示していただいた。

#### ■課題志向型アプローチにおける身体と環境（吉尾雅春論文）

理学療法の究極的效果は、日常的な環境のなかでパフォーマンスとしていかに表現されるかで問われるべきである。運動制御の反射・反応モデルや階層理論に拠り所を求めたこれまでの理学療法は変革期を迎えている。人間は経済活動をしながら社会を構成しているが、その環境から制約も受ける。そのような時代を反映して、課題志向型アプローチはより具体的でわかりやすい方法として定着しつつある。

#### ■生態心理学における身体-環境（高橋 綾論文）

本稿では、心理学者 JJ ギブソンの創始した「生態学的アプローチ」における身体-環境の基本的な考え方を、「環境」、「情報」、「アフォーダンス」、「知覚システム」をキーワードとして用いながら紹介する。また頸随損傷者の事例から運動障害を、生態学的アプローチによる身体を取り囲んでいる環境と共に捉える視点から捉えることを試みる。

#### ■脳障害における身体と環境（宮本省三論文）

脳は身体を介して環境に意味を与えている。脳損傷後の運動機能回復は「運動学習」であり、経験によって脳は改変する。セラピストは、1. 脳は損傷後もシステムとして機能し、学習する（機能回復の可能性）、2. 脳は欠損の知覚よりも知覚の欠損を信じる傾向が強い（認知障害の特性）、3. 脳の損傷を受けていない領域も急性期は機能しないことがある（機能解離の存在）という脳の病理を考慮して治療してゆく必要がある。

#### ■運動器障害における身体と環境（亀尾 徹論文）

運動器疾患の病理的所見と症状とは比例関係にあると考えられがちである。しかし、実際の臨床症状は様々な関連因子に影響された結果として現れる。心理社会的背景を含めた身体内部環境と外的環境因子を総合的に評価し、臨床的推論 clinical reasoning を通して個々の患者の臨床像を捉えることが重要である。常識として受け入れられている知識に対しても、ときには批判的に考察することも必要であり、これが新しい発見につながることもある。

#### ■発達障害における身体と環境（久保雅義論文）

理学療法士の対象とする「運動」とは、単に運動学的な「運動」というよりは、「環境」と不可分な「アクション」とであると考えられる。「身体、環境、課題制約条件の相互作用の結果として運動パターンが『出現』する」という、ダイナミックシステムの考え方を取り入れた運動の見方からすると、複数のサブシステムを含むシステム全体の把握と、サブシステムの相互作用の理解が介入法の選択に重要であることがわかる。